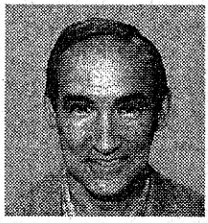
朝日新聞
発行所 大阪市北区中之島3丁目2番4号郵便番号530-11
朝日新聞大阪本社
電話 06－231－0131
郵便振替口座 00950－2－550番
© 朝日新聞大阪本社1997

論壇

甲子園、複雑にして多様な空間



ウィリアム・ケリー

夏の甲子園を目指す高校野球の地方大会が各地で大詰めだ。米国では野茂、伊良部の活躍などにより日本のプロ野球が従来のイメージから脱皮し国際化する一方で、高校野球とりわけ夏の甲子園大会は「保守的」「厳格な管理」「厳しい上下関係」など従来のイメージを引きずっている。しかし、そんなマイナスイメージだけを抱えているのなら、甲子園大会は今日まで引き継がれる国民的行事にはなっていなかったはずだ。その魅力はどこにあるのだろうか。

秘密を知るためには甲子園の雰囲気に深く入らなければならない。私は去年、日本文化と関西のプロ野球三球団の関係を研究するため日本に半年間滞在した際、甲子園球場で大会を一週間ほど見た。一九七〇年代、京大などに四年間留学していた時のテレビ観戦と、現場で見るのとは全然違ったものだった。そして発見したことは、相反する三組の要因が歴史ある甲子園の魅力を作り出しているということである。

最初に感じたのは、「故郷意識」と日本全体を覆う「根なし草の人々」との関係だ。各代表校は郷土自慢を表わすと言われているが、アルプス席の応援団は別にして、球場で各チームを応援するファンの多くは、その土地に現在は住んでいない。以前は、その地に住んでいたか、その地が親の出身地かというだけで、今は東京、大阪などの大都会に住み、今後もふるさとに一生戻ることのない根なし草の人々である。

そんな人たちが、お盆に先祖の霊が生家に帰ってくるように、自分のルーツを甲子園の「ふるさとチーム」に求めて応援する。この青春ドラマに熱狂する人たちは、日ごろの会社、家庭での悩みや都会のけんそうを忘れてふるさとに思いを寄せ、郷土の若い少年らの「純粋さ」を懐かしんでいるわけだ。地理的空間を飛び超えて、時間、世代を飛び超えて、郷土代表をひたすら応援する。

もう一つの対立関係は球場を取り巻く「厳格な秩序」と先の読めない「ドラマ性」ではないか。甲子園は秩序にこだわる世界だ。一糸乱れぬ行進の秩序、監督や審判への絶対なる尊敬、後援者への感謝、チームへの忠誠などがいい例だ。

同時に甲子園はほかにもまして予測困難なトーナメントである。選手たちは試合開始と同時に、いままで経験したこともないプレッシャーを感じる。対戦相手のほとんどは、甲子園にくるまで知らないチームだし、毎年のように出てくる強豪校にしてもメンバーは毎年変わる。結果はだれにも予測がつかない。厳格な管理と秩序のもとで運営されていると見えながら、いったん試合が始まると結末が分からない。ドラマがあり、ハプニングがある。先の読めないサスペンスが魅力なのだ。

最後は「平等主義」と「能力主義」という相いれない思想が共存する点だ。教育の一環としての学校スポーツである甲子園大会は、平等主義を取る教育と能力主義に立つスポーツの双方が持つ性格を複雑に絡み合わせて、劇的に表現する。高校野球は、だれも差別せず均等に育てるという教育の大前提を堅持しながら、大学受験と同じように、能力主義を発揮する舞台である。一度限りの驚くべきプレッシャーのもとで競争が行われる。各チームは平等にチャンスを持ち、日ごろ鍛えた技を競って最後に勝者が一校残る。

試合終了後、球場内の廊下で行われるマスコミの集中取材は、大学の入試結果を張りだす合格掲示板に似ている。すばらしい成績を残した者にはマスコミが集中し、賞賛する。能力競争に敗れた者はうなだれる。大学入試と同様に、ある高校は野球一色の生活を認め、有利なリクルート活動を行っているが、そんな「不平等」も教育体制のゆがみではなく、むしろ甲子園のドラマ性を高める一つの要因と受けとられている。

夏の甲子園でも冬の入試風景でも、その結果に見入る観衆らは、以上述べたような要因に気がつきながらも、若人の勝利への格闘に注目する。その根底には「教育の一環」という甲子園の持つ大前提の平等主義に安心しながら、スポーツの持つ能力主義を楽しむ日本人の姿があるのではないだろうか。

夏の甲子園。文化人類学的にみても興味のある対象である。

（米国エール大学教授・文化人類学＝日本語による投稿）